

古賀秀男著

『チャーティスト運動の研究』

武居 良明

産業革命のかた、人類は、生産力信仰ないし工業化信仰に酔いしれてきたといえるのではないであろうか。そしていまや、二百年を経過してはじめて、その限界を認識するにいたつたのである。工業化ないし生産力上昇に伴う外部不経済問題がそれである。これは、ただたんに公害といった可視的現象にのみとどまらず、集積された巨魔的生産力の効率的運用のための管理組織強化、ひいては社会総体の効率的再編成化——管理社会化——をうじて、人々から勤労意欲を、さらには生活意欲をすら失わしめるにいたつている。

後發国たるわが国では、工場制ないし機械体系導入による生産力上昇は、多少の曲折はあれ、大筋において「国益」として受容されてきたといえよう。したがって、こんにちの、工業化にたいする国民的規模での批判は、わが国としては空前絶後の体験であった。しかしイギリスでは、工場制ないし機械体系は国民歡喜のうちに定着したとはとうていいえず、時にはあからさまに、時にはさまざまな装いのもとに執拗な抵抗に遭遇しなければなら

なかつた。一方のラディズム、他方、R・オウエン(R. Owen)にはじまりF・オコナー(F. O'Connor)へいたる「土地計画」land plan、小経営復帰の試みはその一端を示している。

こうした抗議行為は十八世紀末より十九世紀前半にかけて断続的につづけられる。その間、目前の「工場主」へむけられた攻撃の矢は、次第に工場制度そのものを支えかつ包みこむ政治制度へと拡がっていき、裏切られた選挙法改正を間にはさんでチャーティスト運動へと発展する。

いかなる社会運動であれ、儀式をもってはじまり整然と進行するがときものはありえないが、そうした中において、チャーティスト運動は、最も複雑にして解明困難な社会運動の一つといわねばなるまい。政治史、社会史よりするアプローチはもとより、思想史、経済史、さらには運動家たちの伝記をも駆使しなければならぬ、たいへんな難題である。そうした難題に一人静かに取組んできたのが古賀秀男氏である。過去十数年間、一つまた一つと発表された業績はいずれも、マイクロ・フィルム、複製版などによる根本史料、つまり、あの当時あまた出版されたパンフレット、定期刊行物などの中から入手可能なものを次々と利用した本格的な研究であった。余りにも著名な社会運動の故に、労作の一端をその研究ないし解説に当てたものは数多いが、かくも豊かな研究の積み重ねをバックにした『チャーティスト運動の研究』は、もとより本書をもって嚆矢とする。既発表の論文十二篇よりなるが、氏自からことわっているように、本書にまとめるに当り、かなり大幅な補正、改稿がほどこされている。

月並みではあるが、読者の便を考え、まず章別構成を記してお

こう。

- 第一章 チャーティズムの成立
- 第二章 チャーティスト運動の発展
- 第三章 チャーティスト運動とアイルランド問題
- 第四章 チャーティストの土地計画
- 第五章 後期チャーティズムと社会主義
- 第六章 チャーティストとマルクス・エンゲルス

一、

前世紀末から今世紀初頭にかけてのイギリス経済・社会への厳しい試練は、この国をして「世界の工場」の夢心地より覚醒せしめるにじゅうぶんであり、激しさを増す労働運動は、労働運動史研究にたいする史家の関心を呼び起した。ウェップ、ハモンド両夫妻によって完成された不朽の諸労作は、こうした背景をぬぎにしては考えられない。あれから数十年を経過したこんにち、イギリス内外の経済的、社会的激動は、ふたたびより多数の史家を、いっそう多面的に労働運動史研究へとむかわせた。この流れの中にあつて、これまでついで定説らしきものの形成をみなかったチャーティスト運動がとりあげられぬはずはない。十九世紀末から今世紀初にかけて出版されたチャーティズム関係出版物の再版統出、根本史料の復刻出版の盛況はこの点を物語っており、いまだ一書にまとまった研究は寡聞にして知らないが、さまざまな学術誌に論文のスタイルで研究発表がおこなわれつつある現状である。著者は、右の研究動向にさらにさいきんのソ連邦におけるチャーティズム研究をも加味しつつ、一九六〇年前後から後の研究を

三つの流れに大別する。第一は、古典的見解の不明確な部分を補いつつ、労働運動の発展という観点からチャーティズムにおける階級性と階級意識の成長とを強調する傾向、第二は、中産階級史ないし自由主義史的観点からチャーティズムを把握し、中産階級運動の発展史の中にそれを位置づけ、中産階級の性格を強調するまತ್ತたくの新見解である。第一の見解が古典的見解の精密化を意図するのたいし、第二のそれは、古典的見解へのラディカルな修正を迫るもので、P・ホリス(P. Hollis)、B・ハリソン(B. Harrison)、D・ロウ(D. J. Rowe)らにより代表される。第三の傾向は、運動にたいして最も大きな影響力をもったリーダーたるオコナーをめぐる研究で、かれをもつて機械と近代工業に反発する「うしろむきの社会的イデオロギー」の持主としてとらえる。著者は、この見解を、オコナーが提唱した土地計画と密接な関係をもつものと解釈し、この見解を推していけば、かれの影響下にあつた全運動をうしろむきとみなすことに、換言すれば産湯と共に赤子を捨てるの愚につながる、との指摘をおこなっている。

二、

第一章の課題は、一八三〇年の急進主義の新展開からチャーティズム成立へいたる過程の解明にある。

三〇年代前半の社会運動は、首都労働組合による労働諸階級等全国同盟、これに対立しつつも中産・労働階級の協調路線をねらう全国政治同盟、労働者階級急進派、イングランド北部地方で

抬頭しつつあった労働組合の全国的連合化への動き、などにより代表される。この時期の諸組織の特徴は、組織の名称のいかんを問わず、純粋に工場労働者階級のみにより構成されてはおらず、「中産階級」を少なからず内に含むという点にある。こうした特徴は、運動の理念などにも現れている。たとえば労働諸階級等全国同盟の基本綱領中の人権宣言には、「ロック以来の伝統とペイン主義的自然権思想を基礎とし、それに労働全取権の主張を重ね合わせ」た主張が織りこまれている。この点、労働者階級急進派とても例外ではない。著者によれば、かれらは「コベット、ハントらの小ブルジョワ的急進主義の枠を乗り越え、労働者の経済的・社会的解放を考えており、普選はその第一歩」であったが、J・オブライエン(J. B. O'Brien)の思想にも看取しようように、中産階級イデオロギーが浸透する余地を残していた。

これにたいし、チャーティズムの起点をなすロンドン労働者協会は、労働諸階級等全国同盟や労働者階級急進派の弱点を克服し、「中産階級を排除した真の誠実な労働者階級独自の組織」たらんと意図するものであった。しかしながら、これとても、運動の展開過程で中産階級との妥協ないしその援助を必要としたのである。ところで評者としていささか気になる点は、当時代人および現代のチャーティズム研究者が使用し、著者もそのまま踏襲する「中産階級」および「労働者階級」の概念規定、ないし両階級を構成する諸階層間の関係をめぐる問題である。伝統的経営形態から工場制度への過渡期を背景にこれら二つの階級を考察するならば、等しく中産階級であっても、いまだ伝統的経営形態のみをとりつつける階層と工場主層との間に利害不一致を見るのは常であ

った。また、伝統的経営者相互間でも貧富の差は甚だしく、かれら同士の利害もおうおうにして対立した。「労働者階級」にしても同様である。労働者階級を厳密に工場労働者のみに限定して考えるならば、かれらはチャーティスト運動のごとき社会運動にたいして、次第に関心を示さなくなったのではなからうかと思われ。というのは、かれらは組織をつうじて雇主に賃上げその他の要求をつきつけ、戦術としてはストライキを有効に使う道へと傾斜しつつあったからである。つまり、政治制度そのものを変えることにより工場制度を否定する、というラディカルな戦略から工場制度下の経済闘争へと転換しつつあったからである。

事情かくのごとくであったから、「中産階級」ないし「労働者階級」がそれぞれ「階級」として一定の政治的態度をとるなり、運動へ参加するなりすることはとうてい考えられず、二つの階級を構成する諸階層が、それぞれの利害関心のおもむくままに政治的態度を決定したと考えられる。したがって、これら二つの階級にかんしても、い多少しく立ちいった分析を必要とするのではないであろうか。

三、

第二章で一八三九—四二年間における運動の発展の様相を整理した著者は、第三章でアイルランド併合撤回運動の特質とその担い手たちのチャーティズムにたいする立場とを析出しつつ、チャーティスト運動とアイルランド問題の結合と乖離の背景ならびに実態を説明する。この章は、次の第四章と共に、著者のオコナー論をもなしており、誠に興味深い叙述となっている。チャーティスト運動がアイルランド問題と深いかわりをもつ、という点は

指摘されて久しいが、この問題を正面から扱った労作となるとわが国では皆無といってさしつかえなく、第三章は、まがいもなくこの方面での先駆的業績といわねばならぬ。

本章では、チャーティズムに終始対立する立場をとりつづけた J・オコネル (J. O'Connell) との対比のもとに、W・ラヴェット (W. Lovett)・オブライエンらチャーティストの 아일랜드問題にたいする姿勢が解明され、こうした作業をつうじてオコナーの 아일랜드問題への接近の仕方が浮きぼりにされる。

オコネルは 아일랜드解放にたいして一定の寄与はしつつも、その「ウィッグ的、ブルジョワ的、反労働者の性格をもったブルジョワ・ナシヨナリズム」の故に、アイルランド民衆の「階級的成長」に反比例して、民衆から離反してしまう。かれがチャーティストたりえなかつたのも、イギリス仕込みのものは、それが支配階級の手になるものであらうと、被支配階級の手になるものであらうと固辞すべし、といった「ブルジョワ・ナシヨナリズム」のためであった。

これにたいし、ラヴェットは、一貫して対照的な立場を守りつづけた。すなわち、「ブルジョワ・ナシヨナリズム」からするアイルランドの分離・独立に反対し、アイルランド問題を、民族問題ぬきの階級問題として把握したのである。その結果、かれは、アイルランド再生のために、「階級解放の立場から民衆がチャーティズムに結集することこそ先決」であると主張した。かれの主張は、著者によれば、チャーティストの正統的見解を示しており、それがアイルランドのナシヨナリストと結合すべき接点をもたぬことはいうまでもない。つまり、オコネルが引きつけえた部分

をラヴェットは引き離す、という結果に終った。そこで、運動論としてはすぐれて現実的かつ妥協的なオブライエンの登場となるわけである。

紙幅の制約もあること故、さきを急ごう。第三章の後半ではオコナー論が展開される。強烈な個性には常につきものであるが、オコナーの場合も、一方では圧倒的人気をかちえつつも、他方、ラヴェット、オブライエン、T・クーパー (Th. Cooper) からは徹底した激しい非難を浴びせかけられた。後のチャーティズム研究家の間でも、R・ガメイジ (R. G. Gammage)、M・ホヴェル (M. Howell)、ホール (G. D. H. Cole) のごとくオコナーをもってチャーティスト運動にとり有害な人物とみなす消極論と、P・スロソン (P. W. Stoson)、F・ローゼンブラット (F. Rosenblatt) のごとくかれをもつて民衆にたいする真の同情者とみなす積極論とが対立したままこんにちに至っているが、支配的地位は前者の消極論により占められる。こうした対立をふまへながら、著者はオコナーの 아일랜드問題への接近の仕方と土地計画 (第四章) とをみていくのであるが、その結果は、「オコナーが単なるデマゴグ、暴力扇動家、目的達成など二の次の扇動家などという評価ではとらえられない」ということであった。その根拠はこうである。オコナーは、「一貫してアイルランドの併合撤回を主張し、イングランドのチャーティストのみならず広く民衆にたいしてもそれを訴え、チャーティストとアイルランド併合撤回派が共に利害を等しくする被抑圧階級として団結するよう働きかけた。しかもかれは、アイルランドの単なる併合撤回はアイルランドに地主議會を生みだす結果に終るとし、併合撤回以前

にチャーティズムが貫徹されるべきであり、逆にチャーティズムなしには支配階級の論理である併合を撤回することは不可能だ、とまで透徹した眼をもって見透していたからである。

要するにオコナーは、「まさしく国際的視点に立つプロレタリア的アイランド解放論の先覚者」であり、著者をしてオコナー評価を高からしめているのも、ほかならぬこの点にあるといえよう。しかるに、「土地計画」におけるオコナーは一転してプチ・ブル志向性を示す。つまり、同計画は財産共有制ではなく、財産分割制にもとづいているのである。この点に立ちいる前に、著者の叙述によりつつ「土地計画」の概要に耳を傾けよう。

計画によれば、まず労働者・民衆から少額ずつの資金を集めて土地を購入し、そこに四エーカー単位の小農場制の入植地をつくり、工業地域の貧しい労働者五千家族を入植させる。そうすれば、入植者は一人残らずチャーティストとなり、運動の推進力となるというわけである。見られるとおり、計画には多分にオウエンの影響の跡を認めうるのであるが、両者の間にはいくつかの相違点も看取しうる。その主なものはオコナー自から語っているように、「オウエン氏が現制度に代えて実践したような共同社会の原理はひじょうに好きだ。一方わたしは、共同社会の原理に對立する、個人的な責任と所有の制度にもとづく協同主義制度がひじょうに好きだ」(傍点は評者による)、との一点に存するといえよう。

評
ここで著者は、こうしたオコナーの土地計画にたいし、I. プロサロ (I. J. Prothero) らの見解によりつつ次のようにコメントする。すなわち「小農場入植運動にたいする労働大衆の関心は……当時にあつては低賃金と失業の不安におびえる労働者および

労働組合の自衛運動として、『空想的でも馬鹿げたものでもなく』大衆的・現実的基盤をもっており、單純に機械に反発するうしろむきの運動ではなかったのである」と。しかし評者は、この点にかんし著者とはやや意見を異にし、次のような解釈を施したいと思う。つまり、十九世紀の五十年前後にいたるまで、条件付き工業化を内に含む小農場入植運動、換言すれば「再生産構想」に立脚した小農場化運動は、多かれ少なかれユートピア的性格をもつはずだ。ちなみに、条件付き工業化とは、オコナーの場合は「健全な制限下の機械」使用として、オウエンの場合はかれが構想した「共同村での機械使用」として表現され、私的工場制下の機械使用を峻拒する、ということである。

オウエンにしろ、W. トムプソン (W. Thompson) にしろ當時のユートピアたちは、工場労働者の、小農場経営つまり半農半工の小経営、への復帰不可能とみていわば改善の策として共同村を構想するにいたつたのであり、こうした経緯をふまえるならば、右二者とオコナーの小農場経営論との間の差異は僅少にとどまる、という点が了解されよう。要するに、オコナーの小農場経営論は、結果的には「低賃金と失業の不安におびえる労働者および労働組合の自衛運動として……大衆的・現実的基盤をもつた」のであるが、主観的にはそうした「現実性」を超越したより遠大なユートピアを構想していたのではあるまいか。全国土地労働銀行宣伝綱領においてオコナーらがこねた以下の主張——「小農場制は労働の公正な価値基準を確立しうる唯一の、実効力ある手段であり、……イギリスの芸術・科学を他のすべての国民より凌駕させ、善良な性質を増進させ、悪い性質を抑制しうる唯一、

の手段である」——は、ある意味あいからするならばきわめて格調の高いものであり、当時のユトウピアンたちに等しく看取されるエートスを表現したものと見えるであろう。一八四七年に「土地計画」の支持者であったエンゲルス（二〇七、三五五ページ参照）が一八五一年には一転して批判的となった（三八七—八八ページ参照）、という著者の興味深い指摘は、オコナーの小農場経営論の現実（の受容のされ方）と理想との間の間隙を伝えるものといえるのではなからうか。

四、

第五章および終章では、後期チャーティズムの社会主義への接近の問題およびマルクス・エンゲルスとチャーティズムとの相関関係をめぐるさまざまな問題が扱われている。

従来チャーティスト運動史研究は、一八四八年四月十日、ケニントン・コモンの大請願集會を頂点とした第三次請願運動の挫折と大弾圧、ならびにオコナーの「土地計画」のいきづまりと指導者としてのカリスマ性の喪失とをもって運動の終末と見なし、五十年代のチャーティズムにたいしては大きな位置を与えなかった。ホヴェル、M・ベア (M. Beer)、ウェップ夫妻らの研究がいずれもそうしたいき方を示しており、評者もことばの正しい意味でのチャーティスト運動は一八四八年をもって終了したと考えている。しかし著者は、五十年代の後期チャーティズムの重要性を強調し、その叙述に本書全体の四分の一を費している。

著者によれば、なるほど、一八四八年以後ケニントン・コモン集會に匹敵するような、イギリス支配階級を震撼させた大衆運動は二度と起らず、またチャーティズム支持者も一八四一—四二年

の五万人から僅か数千人へと減少した。しかしながらチャーティスト運動は、一八四八年の崩壊により死滅し去ったのではなく、四九年以後五十年代初期において社会主義的チャーティズムとしてよみ返ったのである。後期チャーティズムにおいては、四八年時点までの運動に参加していた「低い意識の雑多な階層が脱落し、残ったチャーティスト左派が運動の担い手となり、イギリスの現状をふまえた社会主義的・革命的チャーティズムへと発展・変質した」のである、と。こうした側面に注目する著者は、五十年代初頭のチャーティズムをもって同運動の「運動思想的到達点」であった、とまで評価する。また著者は、右のような評価をくだすに当たって「マルクス、エンゲルスも、一八五〇年代初頭のチャーティズムに力強い支持と助言とを惜しまなかった」事実をも、一つの根拠として指摘する。

だが評者は、後期チャーティズムにかんしても、これまで断片的に示してきた私見との関連で、著者とはいくぶん異なった評価を施したいのである。すなわち、著者は「低い意識の雑多な階層」の脱落によって「革命的チャーティズム」へと発展・変質したとの理解を示すが、ほかならぬこうした階層を主力として含む「労働者階級」によりチャーティスト運動は開始され、四八年にいたるまで支えられてきたはずであり、かつまた、著者自から指摘しているように、かれらが脱落して以後の後期チャーティズムは「ついに労働大衆を再結集することはできなかった」のである。著者はその理由として「激しい弾圧」と、「一八四〇年代後半に始まったイギリスの経済的繁栄」とをあげるが、評者としてはこれらの理由に勝る本質的なそれとして次の事実を指摘したい。つ

書 評

まり、十九世紀なかばにいたるまでの社会運動の担い手となった有力な部分は、小生産者ならびに、伝統的小経営より脱落して工場労働者となり小経営への復帰を希求する階層、であったが、四十年代も終りに近づくや工場制度以外の作業形態を知らないといった労働者が多数を占めるにいたった。かれらにとって社会運動とは狭義の労働運動にはかならず、雇主の背後にある政治制度そのものを否定しユートピアを構想するがごときは思いもよらなかったのである。

一八五八年にイギリスを旅したH・テーヌ(H. Taine)は「イギリスの労働組合は」賃あげ以外の目的をもっていない。……それらはユートピアを頭に描いてはいないし、また、社会を改革し、高利貸を打倒し、万人に平等な資金を、とか、すべての個人を国政に参加させよ、といった伝統的原理を夢みてもない」、との鋭い指摘をおこなっているが、これは、後期チャーティズムの低調さを裏づけると同時に、それがことばの蔽密な意味でのチャーティズムとは異質の運動である、ということをも示唆しているとはいえないであろうか。したがって評者は、チャーティスト運動の「運動思想史的到達点」としては、著者が詳細に展開したオコナーの小農場経営論をこそあげるべきではなからうか、と考えている。それも「低賃金と失業の不安におびえる労働者および労働組合の自衛運動」、換言すれば「大衆的・現実的基盤」との関連のもとでの小農場経営論ではなく、「非現実的」なユートウピア論としてのそれである。

次に、マルクス・エンゲルスと後期チャーティズムとのかわりあい、とりわけ兩人による後期チャーティズム評価の問題であ

るが、第六章における著者のG・ハーニー(G. J. Harney)書簡にかんする興味深い研究によって見る限り、当時のイギリス政治をめぐるエンゲルスの見解は一貫して楽観的に過ぎるようであり、そうした楽観論が因となり果となって後期チャーティズムをも過大評価に導く結果となっていないであろうか。

以上、古賀氏の雄辯を精読しつつ評者として見解を異にする点若干につき、断片的ながらコメントしてきた。そうした相違点はあれ、本書はチャーティスト運動史研究上逸すべからざる業績であり、今後とも同学の研究者にたいし裨益するところ大であると信じて疑いないところである。(A5判・四〇二―三頁 一九七五年三月、ミネルヴァ書房 四、二〇〇円)

(信州大学教授・)

一九七五年一月三日印刷 定価六〇〇円
一九七五年一月一日発行

史 林 (第五八巻第六号)

発行人 史 学 研 究 会

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部
理事長 今 津 晃
振替京都五一五五番

印刷所 中村印刷株式会社
京都市下京区七条御所ノ内中町五〇